



狐狸の 妖怪



川崎ゆきお

冬場冬眠で、夏場は夏バテで死んだようになっている妖怪博士だが、少し秋めいてきたので、動き出した。春先の虫の蠢きではなく、涼しくなったからの虫だ。鈴虫やバッタのようなものだろうか。

「イナゴは霊的な存在だったのかもしれないなあ」

いつものように妖怪博士付きの編集者に語り出す。

「イナゴですか」

「あれは、群れる。集団的な狂気のようにな」

「イナゴは妖怪化しますか」

「イナゴはイナゴのままだろう。数が多いと、それだけでも妖怪のようなものじゃ。集まれば雲より大きなモンスターだ」

「この季節ならカマキリでしょ。あれは形からいっても妖怪になるでしょ」

「ああ、あの鎌が異様じゃのう。だから、カマキリをモデルにした妖怪もいるはず。それにオスを食い殺すらしいので、人から見ればそれは妖怪じゃ」

「カマキリ夫人なんていましたねえ」

「それよりも」

「何ですか博士」

「話の腰を折るようだが、狐狸だ」

「また、狐と狸の話ですか」

「狐や狸の絵を見たことがあるだろ」

「あります。玄関先には狸の置物があるし、お稲荷さんに行けば狐がいますよ」

「違うだろ」

「え、間違ったこと、言ってます？」

「そうじゃなく、本物の狐とは違う」

「それは当然でしょ。作り物なんですから」

「そういう意味ではなく、似ておらん」

「はあ」

「例えば狐や狸の剥製を飾っていても、それらしく見えん」

「ああ、犬のように見えたりしますね」

「動物園で狐を見てもそうだ。狐はこんな動物だったのかと始めて見る思いじゃ。狸もそうだ。見慣れた狸じゃない」

「それはありましたねえ。檻の中で探したりしましたよ。イメージがなかなか合致しなくて」

「四つん這いで歩いている狸を見ても、狸と思いにくい。あれはやはり後ろ足だけで立たないとだめじゃ。下腹を出してな。それと徳利と背には笠を」

「そうすれば、すぐに分かりますよ」

「だから、本物の狐や狸とは遠いところにある。この差、この違いが変化、つまりヘンゲで、化けたのも同然」

「それは特徴を抜き出し、誇張、デフォルメしただけでしょ」「その行為の総称を妖怪化と言うのかもしれないが、怪しいものに限られる」

妖怪博士は夏の間、ずっとそれを考えていたようだ。

「それだけじゃ」

「それだけですか。本物と少し違うから妖怪と」

「単純に言うとなんかそうじゃが」

一夏の成果にしては大した研究ではなかったようだ。

了